

学力調査結果について

1 概要

【平均正答率】

	国語	算数
泊小学校	7 5	6 6
鳥取県	6 8	6 3
全国	6 7. 7	6 3. 4

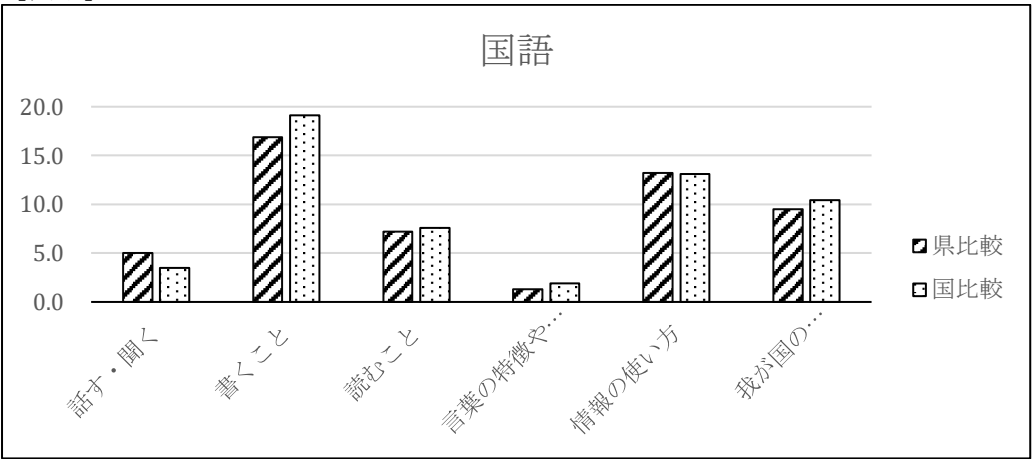
【平均正答数】

	国語 (全14問)	算数 (全16問)
泊小学校	1 0. 5	1 0. 5
鳥取県	9. 5	1 0. 1
全国	9. 5	1 0. 1

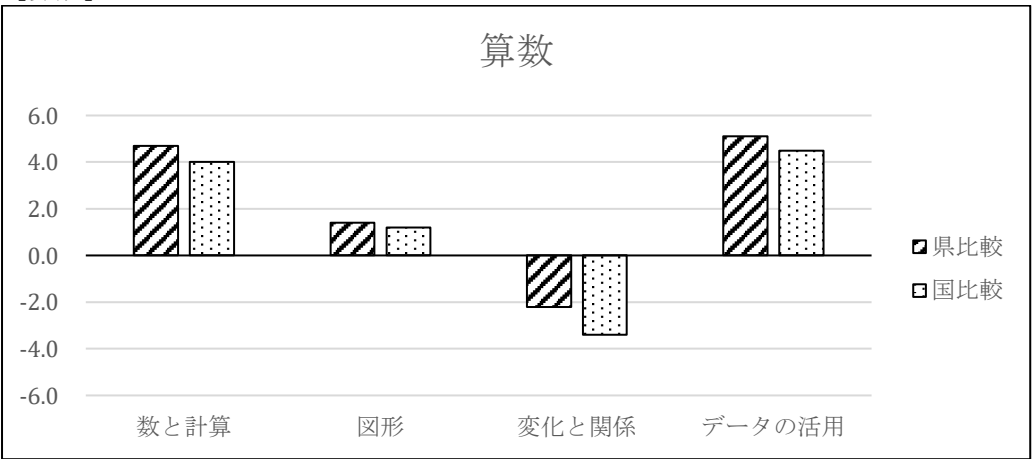
国語、算数ともに、平均正答率、平均正答数では、県平均、全国平均を上回った。

2 領域別正答率比較（単位はポイント。泊小を基準（0 p t）としての県比較、国比較）

【国語】



【算数】



領域別に見ると、国語では、どの領域も、県平均、全国平均を上回った。特に「B書くこと」（思考力・判断力・表現力等）は、大きく上回った。

算数では、「A数と計算」「B図形」「Dデータの活用」は、県平均、全国平均を上回っているが、「C変化と関係」は、下回った。

3 問題別正答数と分析（全国比10ポイント以上差があったもの。ptはポイント）

【国語】

番号	問題の概要	出題の趣旨	正答率(全国比)と分析
1 二 (1)	オンラインで交流する場合において、和田さんが話し方を変えた理由として、適切なものを選択する	話し言葉と書き言葉との違いに気付くことができるかどうかをみる	◎95.0%(+19.1pt) 「だれが何をしているのかが分からなくなったので、もう一度教えてもらえませんか。」という村木さんの発言を受け、話し言葉の特質を踏まえて、言葉の順序に気を付けて短い文に区切った話し方に変えたことを捉えていた。
2 一 (2)	【高山さんのメモ】の書き表し方を説明したものとして、適切なものを選択する	情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができるかどうかをみる	◎100%(+13.1pt) 高山さんが、【高山さんのメモ】において、「わたしたちの学校のよさ」という中央の言葉を線でつなぎながら、文章に書くことを決めていることを捉えられていた。
2 二	【高山さんのメモ】の空欄に入る内容を、【高山さんの取材メモ】を基にして書く	目的や意図に応じて、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる	◎85.0%(+28.4pt) 「たてわり遊び」のよさについて考えたことと、【高山さんの取材メモ】の下級生に聞いたことから取り上げたことを、60字以上、100字以内で書くことができていた。
3 (一)	【物語】の一文の中の「かがやいてます」の主語として適切なものを選択する	文の中における主語と述語との関係を捉えることができるかどうかをみる	▲50.0%(−12.3pt) 「かがやいています」の主語が「まぶしい」と捉えている児童が多く(30%)修飾と被修飾との関係や主語・述語との関係を捉えることができていない。
3 二 (1)	「オニグモじいさん」が「ハエの女の子」にどのように話すのか迷っていると考えられるところとして、適切なものを選択する	登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えることができるかどうかを	▲55.0%(−11.9pt) 「ぶあいそうに言いました」などの行動の描写に着目しているが、「オニグモじいさん」が「ハエの女の子」にどのように話すのか迷っていると考えられる描写を捉えることができていない。また、番号で答えなければいけないのに記号で答えている児童が少なくない。

3 二 (2)	【話し合いの様子】で、原さんが【物語】の何に着目したのかについて説明したものとして、適切なものを選択する	人物像を具体的に想像することができるかどうかをみる	◎90.0% (+17.5pt) 【話し合いの様子】において、原さんが、【物語】の①や②の内容を結び付けて、「登場人物の気持ちや考え方」について考えたことを話していることを捉えられていた。
3 三	【物語】を読んで、心に残ったところとその理由をまとめて書く	人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができるかどうかをみる	◎90.0% (+17.4pt) 【話し合いの様子】を受けて、【物語】を読んで、心に残ったところとその理由を、【物語】から言葉や文を取り上げてまとめることができていた。
3 四	【原さんの読書の記録】の空欄に入る内容として適切なものを選択する	日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気付くことができるかどうかをみる	◎85.0% (+10.4pt) 原さんが、【原さんの読書の記録】を基に、「読書を通して、自分の心にひびく言葉や今までになかった考えを見つけることができる」と気づいたことを捉えられていた。

【算数】

番号	問題の概要	出題の趣旨	正答率(全国比)と分析
3 (3)	直径22cmのボールがぴったり入る箱も体積を求める式を書く	球の直径の長さと立方体の一辺の長さの関係を捉え、立方体の体積の求め方を式に表すことができるかどうかをみる	▲25.0% (-11.5pt) 問題文を把握できていない。(何を問われているのかわかっていない) 球のイメージにひきずられて本来は無意味である円周率3.14を用いた答えが多かった。
4 (1)	$540 \div 0.6$ を計算する	除数が小数である場合の除法の計算をすることができるかどうかをみる	◎90.0% (+19.9pt) 除数が小数である場合の除法の計算($540 \div 0.6$ を $5400 \div 6$ として計算する)をすることができていた。
4 (3)	家から学校までの道のりが等しく、かかった時間が異なる二人の速さについて、どちらが速いかを判断し、そのわけを書く。	道のりが等しい場合の速さについて、時間を基に判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる	▲15.0% (-16.0pt) 速さの概念を理解できていない。足し合わせて分速400mと答えた児童が多かった。
5 (1)	円グラフから、2023年の桜の開花日について、4月の割合を読み取って書く	円グラフの特徴を理解し、割合を読み取ることができるかどうかをみる	◎95.0% (+14.2pt) 円グラフの一目盛りの大きさを正しく捉え、目盛りを数えたり読んだりして、「4月」の割合を求めることができていた。

4 考察

- ・国語では、物語教材で「文の中における主語と述語との関係を捉えることができるかどうかをみる問題」（本校正答率 50.0%、県平均 64.3%、全国平均 62.3%）「登場人物の相互関係や心情などについて、描写を基に捉えることができるかどうかをみる問題」（本校正答率 55.0%、県平均 66.4%、全国平均 66.9%）で、平均正答率が低かった。文の中での語句の役割や語句相互の関係に気をつけて、文の組み立てを理解したり、物語教材では、特に、登場人物の行動や会話、様子などを表している複数の叙述を基に人物像について具体的に想像したりするなどていねいに扱っていききたい。また、「学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる問題」の正答率も 50% と高くはなかった。
- ・算数では、変化と関係領域（主に速さの問題）の平均正答率が低く（本校 48.3%、県平均 50.5%、全国平均 51.7%）中でも「道のりが等しい場合の速さについて、時間を基に判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる問題（「理由」を記述する問題）」（本校 15.0%、県平均 31.2%、全国平均 31.0%）が低かった。「図形」の活用や速さの意味の理解が十分でないことが誤答につながった。算数の学習においては、言葉や数、式、図、表、グラフなどを用いて、筋道を立てて説明したり、論理的に考えたりして、自ら納得したり他者を説得したりすることができることが大切である。「事実」を説明（記述）する、「方法」を説明（記述）する、「理由」を説明（記述）するなど、算数の学習では、見通しをもち筋道立てて考えたり、その考え方や解決方法を算数用語を使って説明したりすることを大切にしたい。計算ができればいい、答えが出ればいいという指導ではなく、回り道に見えても、子どもの予想や問い（疑問）を大切に授業を展開し、数学的な見方、考え方を養っていききたい。

学習状況調査結果について

1 生活習慣や学習習慣に関する項目について

○「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」

- ・本校児童は、「している」「どちらかといえばしている」が 92.8% で県（91.2%）全国（90.5%）を上回っている。「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」という問いに対しては、「している」「どちらかといえばしている」と回答した児童が 75% で、県（84.4%）全国（93.7%）で下回っている。就寝時刻と SNS や動画視聴時間との関連についても実態把握し、家庭と連携して、基本的生活習慣を確立していききたい。

○「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」

- ・本校児童は、「できている」「どちらかといえばできている」が 75% で県（80.1%）全国（80.7%）を下回っている。勉強を「自分ごと」にするために、自分で目標や計画を立てたり、自分の学びを振り返る経験をさせたりするなど、望ましい学習習慣を確立させていく必要がある。

○「学校の授業以外に、平日、1 日あたりどれくらいの時間、勉強しますか（学習塾、家庭教師、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」

- ・本校児童は、「3 時間以上」0%（県 5.5%、全国 11.0%）「2 時間以上 3 時間未満」0%（県 12.2%、全国 12.5%）、「1 時間以上 2 時間未満」10%、（県 35.0%、全国 31.1%）の割合が低く、「30 分以上 1 時間未満」45%（県 30.7%、全国 27.0%）「30 分未満」40%（県 12.1%、全国 13.0%）の割合が高い。「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1 日あたりどれくらいの時間勉強しますか（学習塾、家庭教師、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）」の問いに対しては、本校児童は、「4 時間以上」（県 2.7%、全国 7.3%）「3 時間以上 4 時間未満」（県 3.7%、全国 4.3%）「2 時間以上 3 時間未満」（県 13.0%、全国 9.9%）」ともに 0% で、「1 時間未満」60%（県 35.5%、全国 36.2%）「まったくしない」が 20%（県 9.1%、全国 15.1%）で、平日、休日ともに、県平均、全国平均と比べて、圧倒的に家庭学習の時間が少ないことが言える。

家庭学習が「宿題」で終わってしまっていると考えられるが、家庭学習に取り組めていない個々の原因を把握し、家庭学習の習慣づくりの必要がある。と同時に、家庭学習についても「何をねらうのか」

「どんな力をつけるのか」など内容について検討していく必要がある。

○「普段（月曜日から金曜日）、1 日あたりどのくらいの時間、携帯電話やスマートフォンで SNS や動画視聴などをしますか」

- ・本校児童は、「4 時間以上」15%（県 10.7%、全国 11.9%）「3 時間以上」22%（県 8.2%、全国 8.8%）で、県平均、全国平均と比べて、SNS、動画視聴の時間が長いことが言える。「持っていない

い」と回答した児童の割合は35%（県26.7%、全国21.1%）で、通信機器を持っていない児童の割合は県平均、全国平均と比べて高い。また、「携帯電話、スマートフォンやコンピュータの使い方について、家の人と約束したことを守っていますか」の問いに対しては、本校児童は、「きちんと守っている」「だいたい守っている」の割合が60%（県67.0%、全国71.1%）で、全国平均、県平均を下回っている。メディアとの上手な付き合い方についての発達段階に応じた指導、保護者啓発、特に視聴時間が多い児童については個別に指導をしていく必要がある。

○「放課後や週末に何をして過ごすことが多いですか（複数選択）」

・本校児童は、「家でテレビ動画を見たり、ゲームをしたり、SNSを利用したりしている」と回答した児童の割合が90%（県81.4%、全国79.1%）で最も高く次いで、「友達と遊んでいる」と回答した児童の割合が75%（県65.8%、全国64.2%）で高い。

2 自分に関する項目について

○「自分によいところがありますか」

・本校児童は、「当てはまる」「どちらかといえばあてはまる」80%で、県（83.9%）全国（84.1%）を下回っている。（前年度100%）

○「人が困っているときは、進んで助けていますか」

・本校児童は、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が80%で、県（92.2%）全国（92.7%）を下回っている。（前年度100%）

○人の役に立つ人間になりたいと思いますか。

・本校児童は、「当てはまる」「どちらかといえばあてはまる」75%で、県（95.5%）全国（95.9%）を下回っている。（前年度100%）

○普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか。

・本校児童は、「よくある」「どちらかといえばあてはまる」95%で、県（91.3%）全国（91.7%）を上回っている。

学校生活の中で、児童一人一人の良い点や可能性を見つける、ほめる、違いを認め合うなどの取り組みを引き続き充実していきたい。自分のよさは他者から認められることで自覚される。周囲の人が「よさ」を褒め、自己肯定感や自己効力感、自己有用感を高める関わり方や声かけをしていきたい。また、自己有用感（誰かの役に立っている感覚）が高いと積極的に発言・行動したりでき、人間関係が良好になり、児童の幸福感（ウェルビーイング）につながる。子どもたちのウェルビーイングを高めるためにわかる授業と居心地のよい学級づくりを実践するとともに、たてわり班活動や異学年交流（上学年集会、下学年集会）、地域の園児や高齢者との交流など、多様な人との協働的な活動を主体的に行うことを通して、自己有用感の高まりを促したい。

3 いじめに関する項目や学校生活に関する項目について

○「いじめは、どんな理由があってもないこといけないことだと思いますか」

・本校児童は、「当てはまる」が85.0%で、県（81.3%）全国（79.5%）を上回り、「どちらかといえば当てはまる」を含めると100%となっている。「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童について、そう答えた理由について把握し、どんな理由があってもいじめは許されないこと、同時に、友達を多面的に理解することやトラブル解決の方法などを指導する必要がある。合わせて、児童の心が満たされるようないじめをしない心の環境づくり、注意し合える人間関係づくりを継続していくことが必要である。また、いじめの未然防止のためにも、大人（教員）に相談できるような児童と教師間の信頼関係作りに努める必要がある。

4 地域・ふるさとに関する項目について

○「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」

・本校児童は、「当てはまる」が70.0%で、県（83.6%）全国（83.5%）を下回る。

総合的な学習の時間を中心に、学習の終盤では自分に何ができるのか考え、学んだことを発信するような学習を積極的に行い、経験を積み重ね、地域に何ができるのか考え行動できる子どもを育てていきたい。

5 授業・教科の学習等に関する項目について

- 「5年生までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」
- ・本校児童は、「ほぼ毎日」65%で（県 22.2% 全国 25.3%）県平均、全国平均を大きく上回っている。
- 「5年生までの学習の中で、PC・タブレットなどのICT機器を活用することについて、
- 「（１）自分のペースで理解しながら学習を進めることができる」
- ・本校児童は、「とてもそう思う」「そう思う」が95%（県 85.1% 全国 85.5%）で、県平均、全国平均を上回っている。
- 「（２）分からないことがあった時に、すぐに調べることができる」
- ・本校児童は、「とてもそう思う」「そう思う」が75%（県 55.1% 全国 58.4%）で、県平均、全国平均を大きく上回っている。
- 「（３）楽しみながら学習を進めることができる」
- ・本校児童は、「とてもそう思う」「そう思う」が95.6%（県 86.7% 全国 86.0%）で、県平均、全国平均を上回っている。
- 「（５）自分の考えや意見を分かりやすく伝えることができる」
- ・本校児童は、「とてもそう思う」「そう思う」が70%（県 76.4% 全国 79.2%）で、県平均、全国平均を下回っている。
- 「（６）考えを共有したり比べたりしやすくなる」
- ・本校児童は、「とてもそう思う」「そう思う」が90%（県 83.3% 全国 86.1%）で、県平均、全国平均を上回っている。
- ICTを積極的に活用していることで、学習効率の向上が見られ、受け身ではなく、主体的・能動的な授業につながっている。また、画像や動画の活用により、興味・関心が高まりモチベーションを高めるとともにデジタル機器を使う楽しさ、新鮮さが学習に意欲的に取り組めることにつながっている。
- 「5年生までに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか」
- ・本校児童は、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」65%で、県（77.4%）全国（79.6%）を下回る。
- 「学習した内容について、分かった点やよくわからなかった点を見直し、次の学習につなげることができましたか」
- ・本校児童は、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」65%で、県（79.9%）全国（80.8%）を下回る。
- 本校児童の課題として、学習したことを生かして活用することや自分の考えを発表したり発信したりすることに苦手意識をもっている児童が多い。普段の授業の中で、既習学習を生かして見通しをもったり、自分なりの方法で解決したりすることを大切にする中で「思考力・判断力・表現力」を育てていきたい。また、自分の課題を明確にするために、できたことだけでなく、できなかったことも記述するなど、振り返りを充実させたい。高学年では、予習をし、わかっていることとわからないことを明確にして学習に臨むことにも取り組ませたい。
- 「国語の勉強は好きですか」
- ・本校児童は、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が45%で、県（63.1%）全国（62%）を大きく下回る。「国語の勉強は大切だと思いますか」の問いに対しては、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が60%（県 76.7% 全国 78.3%）、「国語の授業内容はよくわかりますか」の問いに対しては、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が85%（県 85.7% 全国 86.3%）で下回っている。
- 「国語の授業で、違う点や似ている点を意識したり、図で示しながら、情報を整理していますか」
- ・本校児童は、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が65%（県 79.5% 全国 82.1%）で県平均、全国平均を下回っている。また、「国語の授業で目的に応じて、簡単に書いたり詳しく書いたするなど、自分の考えが伝わるように工夫して文章を書いていますか」という問いに対しては「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が70%（県 82.2% 全国 83.3%）で県平均、全国平均を下回っている。

○「算数の勉強は好きですか」

- ・本校児童は、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が45%で、県(59.1%)全国(61.0%)を大きく下回っている。「当てはまらない」と回答した児童の割合35%も多い。(県17.2%、全国17.7%)「算数の授業の内容はよく分かりますか」では、65%の児童が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している。(県79.5%、全国82.1%)

○「算数の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考えますか」

- ・本校児童は、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が60%で、県(76.7%)全国(77.9%)を下回っている。

○「算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えますか」

- ・本校児童は、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が85%で、県(83.3%)全国(83.3%)を上回っており、粘り強く課題解決に取り組んでいると言える。

算数の学習では、既習学習をもとに問題を解決していく学習展開を実践し、数学的な見方・考え方を育てるとともに、考える楽しさ、解決する喜び、算数学習の楽しさが実感できる算数学習をめざしたい。

○「英語の勉強は好きですか」

- ・本校児童は、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が50%で、県(67.8%)全国(69.3%)を下回っている。「英語の授業の内容はよく分かりますか」の問いに対しては、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が60%で、県(77.0%)全国(78.3%)を下回っている。

中学年のコミュニケーション中心(聞く・話す)の外国語活動から高学年になると、教科として「読み・書き」が入ることで苦手意識をもったり、わからなくなってしまうことが肯定的評価が低くなる原因として考えられる。特に書くことで個人差が大きいことから、音声とアルファベットを結びつけた指導をていねいに行う必要がある。ALTに参画してもらい、例えば、図工の学習を英語で説明してもらい、給食時間に英語で会話するなど、ほんものの英語を使う機会に触れ、コミュニケーションの意義や楽しさを体感させたい。

○「自然の中や日常生活、理科の授業において理科に関する疑問を持ったり、問題を見い出したりすることがありますか」

- ・本校児童は、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が65%で、県(82.7%)全国(83.2%)を下回っている。「理科の勉強は好きですか」の問いに対しては、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」が85%で、県(85.6%)全国(83.6%)をやや下回っているが、肯定的評価の割合が高い。

今後の取り組みについて

○国語について

- ・説明文教材、物語教材、読書教材などについて、1年生からの系統を意識した指導に努め、内容や指導事項の習得を図る。
- ・説明文教材では、文と文、段落と段落の関係を意識した読み方(接続後に着目した指導)をさせる。
- ・物語教材では、登場人物の気持ちを読み取れるように、叙述から読み取った(ポイントになる言葉に着目)人物の気持ちを言葉で表したり、動作化したりしながら、物語を読み解く力を養っていきたい。
- ・文章と図表やグラフなどを関連付けて自分の考えをまとめる活動をしていく。国語科の学習だけでなく、各教科の学習や日常生活においても充実させていく。
- ・子どもが発言し、考えを伝え合ったり、話し合ったりすることを通して、理解を深める。(指導者がゴールを明確にして授業展開をする。)
- ・デジタル教科書や短冊、文章構成図などを活用し、文の構成を視覚化し、理解を深める。
- ・漢字学習では、ていねいに書き続けて練習することだけでなく、同音の漢字についてイメージや意味を考えながら文の中で扱う学習の工夫をしていく。漢字辞典、国語辞典も活用し、語彙を増やす。習得した漢字を読んだり書いたりする機会を意図的・計画的に設け、定着を図る。
- ・読書活動、新聞読書の推奨、長文を読むことに慣れさせる。
- ・音読(読書)を大切にする。くり返し音読することでぶんの構成、言葉の意味の理解、要点や意図を捉えることに慣れさせる。
- ・問題に対して時間配分を考えたり、初見の問題への対応力をつける。(読み解く力をつける)
- ・普段の学習の中で成果物に対して、教員が肯定的評価をして返す。(一言コメントなど)

○算数について

- ・正確な問題把握ができるように、問題文を確認した後、友達と確認し合ったり、概要を説明したりする場面を設定するなど発達段階に応じて工夫する。
- ・求め方や理由を話し合う活動では、算数用語、図形を構成する言葉や数、式を正しく用い順序立てて説明することを習慣化する。（学年が上がるにつれて記述もできるように）
- ・デジタルばかりでなく、算数的活動（具体物に多く触れる体験）を取り入れ、量感を養う。
- ・身近な場面と学習とを結び付けたり、学習したこと（グラフづくり、二次元の表づくり、データの整理など）を生活の中で活用したりして、「算数で学習したことが使えた」「自分たちの力で解決できた（達成感）」を味わわせ、算数好きな子どもを育てていく。
- ・「学び取らせる」学習活動を展開し、算数好きな子どもを育てていく。

○ICT機器の活用

- ・「とっとりの授業改革10の視点+ICT活用」を活用し、授業の中や家庭学習で、ICT機器を積極的に活用していく。
- ・考えをまとめ発表する場面で積極的にICTを活用していく。

○家庭学習の定着と充実

- ・「何のために宿題や自主学習に取り組むのか、それを通してどんな力が付くのか」など、目的を明確にして児童に伝え、「やらされる」学習から「やりたい」と思える学習に児童の意識を変え、家庭学習の充実と主体的に学ぶ態度を育てる。
- ・学級活動（2）で家庭学習を題材に取り上げたり、取り組み方法や内容（自力でできる内容、量、支援）を具体的に指導し、「自ら学ぶ学習習慣づくり」の定着と各学年の目安の時間をクリアできるようにする。上学年では、予習的な家庭学習を取り入れていきたい。
- ・引き続き、「湯梨浜町家庭学習の手引き」「家庭学習がんばりカード」を活用し、家庭生活に戻った時でも、目標に向かって自己管理し学習に向かうことのできる力を育てる。保護者にも家庭学習に関する情報を積極的に発信していく。

○読書活動の充実

- ・一定の長さの文章を読む体験を積み重ね、文章を読み解く力、思考力を育てるために、隙間時間で意図的に読書の時間を設けたり（タブレットを選ばない）朝読書の時間を有効に使ったりする。
- ・図書館利用を推進し、読書の習慣化を進める。様々な表現や言葉に触れることで語彙力を高め、知識の幅を広げることにつながる。
- ・司書教諭、司書補助員と連携して、児童の読書活動への興味を広げる取り組みをする。
- ・活字に向き合う環境を整え、本だけでなく、新聞などを読む習慣（文章、写真、図などの情報を関連付けて見る力が養われる）や機会をつくる。

○生活習慣の定着と改善

- ・引き続き、生活アンケート（年3回）を実施し、基本的な生活習慣（早寝、早起き、朝ごはん、メディア）の定着を確立させる。自らの生活を見つめ、改善していけるよう、家庭や地域との連携、協力を図る。